

白鷗句会句集

三十一集

平成26年4月—27年3月



白鷗句会句集
三十一集
平成26年4月—27年3月
徴妙画

〔高村英樹〕

鴛の一声聞けり蕎麦の店

四月

離れてはまた結び合う花筏

鎌倉や桜並木の長き坂

母の日や妻の写真に白一輪

五月

乳母車若き母親風光る

纏まといふ物思案の朝や若葉寒

梅雨晴間はしやぐ子供は鬼ごっこ

六月

珈琲の香ついでみ入梅かな

梅雨入りの便りは豪雨を伴ひて

梅雨明や並木の緑色増しぬ

七月

ひとりゐるの雨の七夕物思ふ

ビル風や不意に飛び去る夏帽子

夜もすがら遠き稲妻音もなし

八月

台風の深き爪跡無残なり

立秋は名のみぞ今朝も変わりなし

秋霖やひとりの部屋の昼灯

ひるともし

九月

ひとの訃を受容れがたき夜長かな

秋日や背筋を伸ばす散歩道

野分去り結婚記念日独り酒

十月

秋霖や釣り船の去る音もなし

到来の柿剥く肩の日差しかな

寒風や天地明かに入菫

十一月

一碧の空雪富士を引寄せぬ

今日の幸ここにありけり日向ぼこ

海鳥の丸く固まる冬至かな

十二月

もやひふね
舳舟 ゆらぐことなし冬の海

喧騒を避けて師走の散歩かな

曾祖父になりぬと友の初便

二十七年一月

元日や重ねて友の誕生日

着膨れて弾む歩みの登校児

初午や孫の手土産稲荷寿司

二月

寒風や犬に曳かれて走る人

連なりてふくら雀は電線に

彼岸入り小雨の墓を清めけり

三月

片付けし物を探すや戻寒

咲き初めの桜算へし散歩かな

〔内山さと〕

道標の右歴史道松の花

二十六年四月

花筏宴の火照りを流し行く

春潮千クイーン入港きらめきて

八橋を怖怖 こわごわ 歩み花菖蒲

五月

雲纏ふ白無垢の富士立夏かな

おしげなく摘む作務衣僧終牡丹 ついで

新緑や恩師の和菓子分け合ひて

六月

盛塩を横目で過ぎる夕薄暑

雲の峰駿河の昼餉魚尽し

唇に触れて遊んでさくらんぼ

七月

梅雨籠り母のしぐさで茶棚拭く

百日紅部活の少年齒の白し

葉がくれの空蟬風に遊ばれて

八月

本持ちて読書もせず藤の椅子

青葡萄言葉ちぐはぐあいうえお

幼児の男声して秋蚊打つ

九月

月今宵音吸ひ込みて影蒼し

秋日濃しサレダル履きの海の町

灯笼の揺るるや瀬戸の十三夜

十月

雨すぐる土手に野菊やラシニシグ

大粒の葡萄ぷるりと舌染めぬ

秩父路のバスはゆりかご紅葉山

十一月

遅延バス待てば阿呆あほうと冬鴉

廢屋に色鳥はしやぐ雨上り

枯れ葉踏む大地奏でる心地かな

十二月

紐付きの赤き手袋枝に咲き

遠吠や夕闇迫る冬の海

紙折りて海に投げれば都鳥

二十七年一月

寝正月とてパレ買ひにとび出せり

凍てる夜や明かりとスープ待つ家路

婆行けりリュックの菜花顔出して

二月

残り鴨サーフィン楽しむ波頭かな

初夢を期待すれども覚えなし

田子の裏美しすぎて初夢か

二月

月凍てり犬と戯れけふ明ける

本ワイン準備整へて冬籠り

ふんわりと包まれ歩く春の夜は

三月

鼻上げて突出し嗅ぐや犬の春

暗闇のガラス越しなる春嵐

〔戸崎延子〕

つばくらめ空を十字に切りにけり

二十六年四月

鳶の影日向に落ちて花の舞ふ

5

山門に牡丹のかほり届きゐて

三歳が歌って踊って松の蕊

五月

嬰粟坊主揺れて学校帰りの子

いつ果てむ老老介護つじ燃ゆ

きな臭き防衛論や蟻払う

六月

涼風にマチスの女寝覚めけり

額あぢさる父と見し日の空の果て

風花や小声でシャンツシ浜の露地

春草やビルの礎石を押し合ひて

三月

歴史碑は三叉路にあり松みどり

花は二分人に乞う鳩クツクツ鳴く

〔中澤元子〕

新のりの磯の香りや風通る

二十六年四月

夜桜見心浮きたつ孫誕生

入学児また明日ねと声聞こえ

シヤボレ玉吹くおさなどはけなげかな

五月

咲く藤や日々成長の孫重し

桜蕊降るひとり言犬が聞き

薄暑なくテレビ伝える異変かな

六月

更衣娘に土産ユニクロで

薯蓣の花思い出す人ひとりあり

草刈の香の広さ青々と

七月

夕焼のしみいる道や旬会終え

蜜豆腐歩き疲れて友と入いる

朝焼けや総ての命始まりぬ

八月

片陰やこの苛立ちをもて余あまし

初物の西瓜は鬆入り甘露忌

鬼灯や茂みにひそと赤かくし

九月

身に入むや明日は笑顔で生きぬこう

願い事ささやかなりや盆の月

神無月神のみぞ知る未来かな

十月

太秋刀魚卓賑わひておかわりし

この香めぐり来たるや金木犀

水滴の輝く朝や重ね着し

十一月

秋の夜や去年の今は何思ふ

難しき人の思ひやおでん煮る

冬の朝珈琲の香や部屋に満みち

十二月

日暮散步落葉踏む音響おとびびきをり

冬紅葉傘の中から見るもよし

無時過ぎぬ良き言葉なり年暮るる

二十七年一月

ベランダに搔卷みえし澄みたる日

直球はやんはりと受く父の目よ

七月

涼風や腰に輪ゴムのナース来る

神様と一緒に溶けて夏夕日

吐く息にワインゼリーの震へけり

八月

胸うすき仰臥のままに夏の果

朝日浴び生きているよと白木槿^{おぐげ}

羽蟻の夜病院坂を降りりてゆく

九月

駆落ちの昔もありぬ墓洗ふ

秋深むモノレール行く船ただまり

十三夜老人ホームの窓明かり

十月

夫逝て空いっぱい羊雲

秋深むモノレール影湾行きぬ

枯すすき沈黙^{しじま}の風の中にある

十一月

やはらかに桜紅葉ひかりふる

洋菓子にブランデーの香冬温し^{ぬく}

すし昆布ぱきつと割りて冬至なる

十二月

両膝に肩に冬日の握り飯

まだ若き神主の舞う七五三 しめいわい

雲の上に折鶴みえし澄みたる日

一月

頬赤き少年走る 風 いかのぼり

冬麗や一人の飯は冷めやすし

駅なかの食事はひとり風花す

二月

ベビーカー電車の中に春たちぬ

日溜りの椅子に背伸びて二月尽

鞆鞆に淡きものふる海辺かな

三月

春光や夫の本棚在りしまま

突風に春の蓋とぶ寺小路

〔中野潤一〕

鐘楼の屋根は茅葺き春の暮れ

二十六年四月

アオダモの花やさしく春日さす

祝傘寿景礼門を開けて春

ゆったりと刻の流れで薪能

五月

罌粟一花挿して崩るるまで早し

毬のまま落ちるものありおほでまり

捨てし句のうづたかきこと紫蘭咲く

六月

裏山に色よく映る菖蒲かな

三保の松原風音と皐月波

老鷲や旧要塞の赤煉瓦

七月

マレシヨンに子の増えてをり神輿待つ

パナマ帽永井荷風も被りしか

溝萩の姿勢正しく咲き揃う

八月

青森の船窓に消ゆ揚花火

時差調整四日目となる秋暑かな

ポケツトに挿したるままの秋扇

九月

雨足の瀉走りゆく厄日かな

行く秋の湯立神事ゆだてにまぎれけり

冬用意てきばき済ます年の功

十月

天高し後期高齢者と呼ばれ

紅葉して木漏れ日は美しき切通し

長瀨の流れゆるやか昼の虫

十一月

県央道の隧道ずいどう抱き山粧ふ

冬ざれや矢印辿る地下の駅

削られしまゝの橋の名冬の川

十二月

持ち帰り炬燵で人事考課書く

下校子の過ぎたる道に耳袋

百選の橋より初富士かうがうし

二十七年一月

探し物年賀の兎らのさりてよ

擦れ違ひざまに嚏をされにけり

梅白し懐紙に干支の透かしかな

二月

余寒なほ音せつせとブリンター

豆を撒くまづ前列の兎らへ撒く

梅あかり切妻屋根の高さままで

三月

腕白の丸くなりたる喜寿の春

大涌谷の噴気のアなた雪残る

【岡田一雄】

故郷の^ハム敗れて春逝きぬ

二十六年四月

振り仰ぐ桜大樹に気を貫ふ

長旅を終へて古巣や^{つばくらめ}燕

薰風や衣の行方三保の松

五月

若葉風歴史委くわヒキバスガイド

御大師のみ足にふれて牡丹寺

井戸美人名札のありて菖蒲園

六月

公園に子等の声して梅雨晴間

梅雨晴間気の向くままの万歩計

朝顔や今日の初咲き日記帳

七月

診察日行かねばならぬ炎天下

夏帽子母子揃ひのお買物

緑陰に暫しの憩い犬とわれ

八月

敗戦日笑顔で征ゆきし友想ふ

不足なき世に感謝して終戦日

遙かなる大雪山に秋の雲

九月

赤と白ありて楽しきさるすべり

クラーク像指差す彼方天高し

さわやかに席ゆずられし電車かな

十月

少年の胸に秋風貝ボタン

庭先に残り火となる彼岸花

小春日や少し遠出の万歩計

十一月

対岸の木々美しく秋深し

木漏れ日や北鎌倉の秋の路

歩かねば老ゆると冬帽呉れし人

十二月

来る年も良き年であれ日記買ふ

今日の日に良きことありて爛の酒

又一つ齡重ねて除夜の鐘

二十七年一月

金箔の酒で乾杯年始

初空や一句浮かびてうれしかり

絵手紙に一句添えて春近し

二月

寒明けや残月青く瀉の上

故郷の友より雪の深さかな

北帰行取り残されし鴨一羽

三月

陽のあたる路を選びて犬と吾

若き日の恋の思い出春の風

